問題一　次は、伊藤整の「青春について」という文章である。読んで、後の問に答えよ。

社会的に言えば、われわれは、家、すなわち父母や兄弟から切り離されることによって、独立の生活を始めざるをえなくなる。その時期を「青春」と呼んでいるもののようである。それは、≪　a　≫が生殖のときに散るのに似ているし、また木の実が熟してもとの木から落ちるのに似ている。それは、「名も知らぬ遠き島より流れ」て行く≪　b　≫の実のようなものであり、または風に吹き送られて散る≪　c　≫の、羽根ある実にも似ている。それは、もとの木のそばにいることができない。もとの家やもとの国家秩序を≪　d　≫することができない。私たちは謀反し、切り離されることを願い、否定し、革命しようとする。それゆえ、青春は自分自身のもとの性質すなわち伝統や民族性への反逆と逃亡の衝動をもって始まるもののようだ。それはメツボウか、新生かを賭けて、新しい土地と新しい生活とを求める。その可能性の実現されざる空想の全体が青春の所有であり、新しい生活への焦燥感である。そして人間社会における革新への衝動は、この青春の特質を力として組織されている。文学における革新、社会の革新は、「青年」がするのではないにしても、人間の「青春」がすることである。青春のときに、古い≪　e　≫から切り離された若い心の求める新しい生活への希望が、革命家や科学者や社会学者や文学者たちの心の中に生きて、その仕事を新しい考え方の上に築き上げていき、それが今までの人類の進歩の歴史を形成してきたと見ることができるであろう。そのような意味では、≪　f　≫は、個人にとっての、未完成な一時期としての意味において存在するだけのものではない。人類全体が、青春というものによって停滞から救われ、その血を新鮮にし、自己批判をし、自己の安定を求める古い本能に反して、改革を重ねて今日まで進歩してきたと言うことができるであろう。そのような人類の革新衝動、すなわち、新しい芽生えとしての青春なるものは、個人として、その中に生きている人間から見ると、それは聖なるものへの高まりと生活の崩壊との間にアヤうく保たれているかりの存在と思われるような苦しいものとして意識される。それは、自分を失うという恐怖や、自分の存在が無意義だという劣等感や、生命を賭しても新しい仕事をしなければならないという焦燥となって、暴風のように彼を襲い、彼を翻弄する。そして、洪水のあとのような荒廃の中に≪　g　≫を取り残すという結果をも産み出すもののようである。そして、ある個人が自分の青春を生きることは、彼の意識とは関係なく、人類の血を新しくしていることになるわけである。

問一　傍線部④⑫の読みをひらがなで示し、傍線部⑥⑩のカタカナを漢字に改めよ。

問二　≪a≫～≪g≫に当てはまる語を次から選び符号で答えよ。（同じ符号を二度以上使わないこと）

Ⓐ青春　Ⓑ個人　Ⓒ花　Ⓓたんぽぽ　Ⓔ否認　Ⓕ椰子　Ⓖ秩序　Ⓗ破壊　Ⓘ是認

問三　問題文を三つの段落に区切り、第二段落、第三段落の初めの五字を書き抜け。

問四　傍線部②はどのようなことか。二十五字以内で簡潔に答えよ。

問五　傍線部⑦と、後続の「新しい生活への焦燥感である」という文との間に補う言葉としては、次のどれが適しているか。符号で答えよ。

ア　自己の行為の無意味さを感じるあまりの
イ　メツボウへの恐れから生まれる
ウ　単に空想にすぎないがゆえの
エ　実現の困難さから生じる

問六　傍線部⑧には、具体的にどのようなものがあるか。それを表す語を二つ、問題文中から書き抜け。

問七　傍線部⑨は何をさしているか。

問八　問題文は全体にもの柔らかな調子の文章になっている。その一因としては、助動詞「ようだ」の多用があると考えられるが、この「ようだ」はどう使い分けられているか。傍線部①③⑤⑪⑬の用法として最も適当なものを次のⒶ～Ⓒの中から選び、符号で答えよ。

Ⓐある事物（の形・状態・性質）が他の事物と同じ、または似ていることを表す〔比況〕
Ⓑ内容の指示、または例を表す。〔例示〕
Ⓒ不確かな、または強くない断定を表す。〔婉曲な断定〕

問題二　次の文章を読み、後の問に答えよ。（スラッシュは改行箇所を表す。）

その日私は≪　ア　≫その店で買い物をした。というのはその店には珍しい檸檬が出ていたのだ。檸檬などごくありふれている。がその店というのも見すぼらしくはないまでもただあたりまえの八百屋にすぎなかったので、それまで

あまり見かけたことはなかった。≪　イ　≫私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それからあの②タケの詰まった紡錘形のカツコウ③も、――結局私はそれを一つだけ買うことにした。それからの私はどこへどうあるいたのだろう。私は長い間街を歩いていた。始終私の心をおさえつけていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか弛んできたとみえて、私は街の上で非常に幸福であった。④あんなにしつこかつた憂鬱が、⑤そんなものの一顆で紛らされる――⑥あるいは不審なことが、逆説的な本当であった。それにしても心というやつはなんという不可思議なやつだろう。／その檸檬の冷たさは≪　ウ　≫よかった。そのころ私は肺尖を悪くしていていつも身体に熱が出た。事実友達のだれかれに私の熱を見せびらかすために手の握り合いなどをしてみるのだが、私の掌がだれのよりも熱かった。その熱いユエ⑦だったのだろう、握っている掌から身内に浸み透ってゆくようなその冷たさは快いものだった。／私は何度も何度もその果実を鼻に持っていっては嗅いでみた。それの産地だというカリフォルニヤが想像に上ってくる。漢文で習った「売柑者之言」の中に書いてあった「鼻を撲つ」という言葉が≪　エ　≫浮かんでくる。そして≪　オ　≫胸いっぱいに匂やかな空気を吸い込めば、⑧ついぞ胸いっぱいに呼吸したことのなかった私の身体や顔には温かい血のほとぼりが昇ってきて≪　カ　≫身内に元気が目覚めてきたのだった。……

（梶井基次郎「檸檬」）

問一　傍線部②③⑦のカタカナを漢字に改めよ。

問二　空欄≪ア≫～≪カ≫に適する語を次から選び、符号で答えよ。（同じ符号を二度以上使わないこと。）

Ⓐたとえようもなく　Ⓑ一体　Ⓒなんだか　Ⓓいつになく　Ⓔきれぎれに　Ⓕ深々と

問三　傍線部①は内容を誤解されるような表現であるが、その内の一字を変えると、誤解を生じない表現になる。どこをどう変えれば良いか。簡潔に答えよ。

問四　傍線部④とほぼ同じ内容を持つ語句（十八字）を文中から書き抜け。

問五　傍線部⑤は何か。文中の語で答えよ。

問六　傍線部⑥はどのような意味か。その説明として適当なものを次から選び、符号で答えよ。

ア　不吉な塊に押さえつけられていたのが、檸檬で紛れるというのは不審で、その怪しさは本物だ。

イ　しつこかった憂鬱が檸檬一個で紛れるのは、一見事実のように思われるが、真実からは遠い。

ウ　檸檬一つで憂鬱が消えるというのは考えれば奇妙だが、そういう奇妙なことが、かえって本当だ。

エ　檸檬という不安感をあおるような果物が憂鬱を晴らすというのは、逆説的だが真実である。

オ　しつこかった憂鬱がたった一個の檸檬で紛れるという逆説は、だれがどう考えても矛盾している。

問七　傍線部⑧はどの語句にかかるか。次から選び、符号で答えよ。

ア　なかった　イ　昇ってきて　ウ　元気が目覚めてきたのだった

問題三　次は宮沢賢治の詩「曠原淑女」と、その【解説】である。読んで、【解説】の空欄A～Hを、賢治の詩の中の言葉で埋めよ。（空欄内の丸で囲んだ数字は、そこに入る言葉の字数を示す。）

日ざしがほのかに降ってくれば
またうらぶれの風も吹く
にわとこやぶのうしろから
二人のおんながのぼって来る
けらを着　粗い縄をまとい
萱草の花のようにわらいながら
ゆっくりふたりがすすんでくる
その蓋のついた小さな手桶は
今日ははたけへのみ水を入れて来たのだ
今日でない日は青いつるつるの蕁菜を入れ
欠けた朱塗りの椀をうかべて
朝のさわやかなうちに町へ売りにも来たりする
鍬を二挺ただしくけらにしばりつけているので
曠原の淑女よ

あなたがたはウクライナの
舞い手のように見える
……風よたのしいおまえのことばを
もっとはっきり
この人たちにきこえるように言ってくれ……

〔注〕・けら…わらや樹皮で作った簑のこと。・蓴菜…スイレン科の多年生水草。若芽・若菜は食用になる。

【解説】まず、一行目の「　A⑥　」に注意したい。決してさんさんと降り注ぐ日の光ではない。北国独特の弱い日ざしが雲のすき間から降りてくる感じをいう。「　B③　」は「降ってもくるし、また」と続く。「うらぶれの風」はさわやかでない風のこと。「　C③　」と「うらぶれ」が対応している。

次に注意したいのが、七行目の「ゆっくりふたりがすすんでくる」である。実際は、身につけている物や持ち物のせいで「　D④　」になるのであるが、この語は、しっかり地についた生き方をしている彼女たちの落ちつきを表している。また、「　E⑥　」には、作者の親しく迎える気持ちがある。

九行目と十行目の初めに、「　F③　」「　G⑦　」と並べたことから、作者の、この婦人たちの日常生活に対する関心――一日も休み泣く勤勉に生きる農家の婦人たちへの共感がうかがえる。

十一行目の「　H③　」には、いつも使い慣れている物だという意味が込められている。鍬は唐鍬と平鍬だろうか、用途が違うので一人二挺ずつ持っている。体の横に、長さのある鍬は縛れない。体の後ろに縛る（縛ってもらう）のだろう。両手に荷を持つためにそういう形になる。かなり強く縛らないと鍬が動いて歩きにくい。十三行目の「　I④　」からは、そういう強さとともに、農婦の端正な心のありようと、りりしさが感じ取れる。

当時の東北の農村の貧しくやせた土地とは比べものにならないほど、農業が高度に発展し、耕土が国土の六〇パーセントを占めるウクライナ。したがって、十五～十六行目の「　J⑯　」は、一つの《理想化》と言えよう。『宮沢賢治全集』第一巻語註には「ウクライナの舞い手の服装は我が国東北地方の婦女子の服装に似ている」とあり、作者の単なる恣意的連想でないことが分かる。

「二人のおんな」の姿に花のような笑いを見いだし、屈託ない生命の発現を感じた作者は、ここで「　K⑨　」のイメージに出合うことによって、風の中のもう一つの言葉、本当の言葉を改めて感じ取ったのである。その楽しい言葉がはっきり彼女たちの耳に届けば、その笑いは一層大きく豊かになり、本当に踊り出すかもしれない、と空想は果てしなく広がっていくようだ。

問題四　優れた作家の文体は数行読んだだけで誰の作品かが分かるほど個性的なもので、それを類型化したのがの次のⒶ～Ⓔである。ところで、①～⑤の文章は、Ⓐ～Ⓔの中にある代表的作品の冒頭部分を書き抜いたものであるが、それぞれⒶ～Ⓔのどこに入っている作品か判断し、符号で示せ。

Ⓐ戯作文系の文体＝「浮雲」二葉亭四迷／「富岳百景」太宰治／「アメリカひじき」野坂昭如
Ⓑ写生文系の文体＝「吾輩は猫である」夏目漱石／「暗夜行路」志賀直哉／「氾濫」伊藤整
Ⓒ漢文系の文体＝「雁」森鴎外／「弟子」中島敦／「檸檬」梶井基次郎／「桜島」梅崎春生
Ⓓ叙情的感覚の文体＝「千曲川のスケッチ」島崎藤村／「伊豆の踊子」川端康成／「絵本」田宮虎彦
Ⓔ西欧的感覚の文体＝「機械」横光利一／「暗い絵」野間宏／「壁」安部公房／「飼育」大江健三郎

〔代表的作品の冒頭部分〕

①麻布霞町の崖下にあった私の下宿には、三連隊の起床ラッパが遠くかすかにきこえて来た。それは、青山墓地の崖肌を這い、木々の下枝をぬって、切なくかなしげに聞こえて来ては、暫くは湿っぽい……

②魯の卞の遊侠の徒、仲由、字は子路という者が、近頃賢者の噂も高い学匠・陬人孔丘を辱めて呉れようものと思い立った。似而非賢者何程のことやあらんと、蓬頭突鬢・垂冠・短後の衣という服装で……

③高分子学会の開かれている成律大学というのは、私立大学の中で経営が楽だと言われる学校であり、戦後初めて工学部を置いたので、工学部の校舎は新しかった。旧東京市内のことで、敷地には余裕が……

④草もなく木もなく実りもなく吹きすさぶ雪風が荒涼として吹き過ぎる。遙か高い丘の辺りは雲にかくれた黒い日に焦げ、暗く輝く地平線をつけた大地のところどころに黒い漏斗形の穴がぽつりぽつりと……

⑤炎天に、一点の白がわきいで、あれよと見守る内、それは円となり、円のまん中、振子のようにかすかに揺れ動く核がみえ、一直線にわが頭上をめざし、まごう方なきあれは落下傘、にしても……